

ある男の映像

牧草 泉

彼の家は貧しい母子家庭だった。父は彼が小学一年のときに亡くなった。肺ガンだった。特別な治療は何もしなかった。母によると、かかりつけの医者は「喉のリンパ腺にも転移している、手術はかえって余命を短くする。このまま対症療法でいくのがいいと思う」と言ったという。それでも母と兄は父に手術を勧めた。父がこのまま死を座して待つ身となることにたえられなかったのだ。彼も父を励ますそうと思つて何か言おうとしたが、何を言つていいかわからず、黙つたままだった。

父は医者之言に従つて手術をしなかった。父は痛みなどで苦しむことはほとんどなかった。死ぬ数日前まで健康人と変わらない生活をした。時たま痛むときは、自転車で世話を受けている医院に行き、痛み止めを処方してもらつた。

死に際に、兄と彼を枕元に呼んで父が言つた最後の言葉は、「兄弟仲よく暮らせ」だった。母には「苦労かけた」。

印象に残っているのは、野島の緊張した話しぶりだった。杉子と野島が駅で外国へ旅立つ大宮を見送るとき、野島が、杉子は大宮が好きなんだ、と悟るシーンでは、どうして杉子の心中がわかるのかな？ と、思つたものだった。しかし高校生になつてようやく理解した。その駅の見送りのシーンが鮮やかに思い出され、その時の野島の心境に同情して胸がいたんだ。

彼はたまに見る映画も日本の映画ばかりだったが、あるとき、中一だった兄は洋画も見ろべきだといつて、映画館のある隣の町までは十キロほどの距離だったが、ぼろ自転車に乗せて連れて行つてくれた。

映画は『凱旋門』だった。恐らく再々映ものだったのだろう。この映画の内容もよく理解できなかった。イングリッド・バーグマンとチャールス・ロートンが車に乗つて凱旋門を後ろに見て去つていくシーンだけは覚えていくくらいだった。後になつて『凱旋門』は不朽の名作であることを知り、改めて鑑賞したのだ。

母は、いくら貧しくとも高校は出ておかないと駄目だと言つた。兄は、家や母のことを考えて中学を卒業したら、働くつもりだったが、母の忠告に従つて高校に進学した。定時制高校に通いながら、母と二人で二反の田んぼを耕作した。兄は農閑期には土木作業員などをした。現金収入は、父や母がしてきたように農事以外から得る必要があつたの

子供を頼む」と言つたという。父はその翌日に亡くなつた。父の死に顔は安らかだった。一緒に父を看取つた医者は、「私もこんな死に方をしたい」と独りつぶやいた。彼にはその時の医者の表情がとても印象的だった。人間の死は静寂の中にあるのだということを知つた。

父は建設会社の現場監督をしていた。その稼ぎで生活が成り立っていた。父の死でその収入は途絶えた。途端に貧困が襲つた。父の死後は、母が一人孤軍奮闘した。近くの店の手伝いや土方仕事や農事手伝いなど、何でもこなした。もちろん三つ上の兄も小学生ながら、田畑の仕事では母の加勢をした。彼も母の指示に従つて仕事を手伝つた。夕飯を準備するのもつばら彼の仕事だった。

兄は弟の彼とは三つしか違わなかつたが、彼の父親代わりとなつた。兄は文学少年だった。彼がさんざん頭を下げて友だちから借りてきた漫画を読んでいると、「漫画を読む時間を減らして小説を読むんだ」と忠告した。小学校三年生のとき、兄は彼に一冊の本を持つてきて、読むように勧めた。その本は武者小路実篤の『友情』だった。友人から借りてきたもので、「十日ほど貸してくれるというから、ゆつくり読んでいいぞ」と言つた。

彼は兄の忠告に従つてすぐに読んだ。しかしあまり理解できなかった。「杉子」を挟んでの「野島」、「大宮」の恋愛関係だということは薄ぼんやりとだけわかつた。特に

だ。

兄の成績は優秀だった。四年生になつて担任から進学を勧められた。しかし、経済的に無理と見て、大学進学を断念した。母は兄を進学させてやれなかつたことで、兄に対して「ごめんね、ごめんね」と何度も謝つていた。母は、これからの時代には、多様な知識が求められるようになることを知つていたので。

彼も高校は兄と同じ定時制高校だった。成績は兄ほどではなかつたが、上位に入つていた。兄は彼の成績を見て大学進学を認めた。しかし現役では失敗した。それでも兄は浪人を認めてくれた。兄は言つた。「今度落ちたら、就職だぞ」と。

彼は一浪して希望するN大学に合格した。大学では学生寮に入った。家庭に負担をかけないようにという兄の要望があつたからだ。兄は入学祝に「これはお父さんの遺品の時計だ。大切に使うんだぞ」と言つて、懐中時計をプレゼントしてくれた。時計にはメイド・イン・スイスと英語で印字されていた。

寮は小高い丘の上にあつた。寮の窓からは伊勢湾がはるか遠くに見えた。部屋は二人部屋と三人部屋だった。丘を下つた付近には学生目当てのラーメン屋や、食堂、貸本屋などがあつた。彼は暇なときは貸本屋から本を借りて、部屋で寝転んで読んだ。同室の京都から都落ちしてきた友人

が、「お前って、不精者なんだな」と言つて呆れたような顔をした。でも、彼にとつては、読書は唯一の娯楽であり、心を和ませるものだった。

ただ、貸し本の料金も結構高くて、その他の出費もかさむことが多く、家庭教師や塾の講師などのアルバイトもした。彼は後々思つたことだった。「大学には図書館があつたわけで、なぜ図書館を利用しなかつたのか？ 図書館であればただで済んだのに」と。彼は貸し本屋に入れ込んだことは軽率だったと悔いたことだった。

大学近くのF駅前の通りにかなり大きな商店街があつた。そこは他の店より安かつた。だから友人と遊びがてらよく買い物に行った。その商店街の洋品店に美しい売り子がいた。彼は一目で好きになつた。背丈は百六十センチほど、少し面長の明るい性格で、笑顔のすてきな女性だった。名前はB子といった。これは彼女に面と向かつて尋ねて確認したのでなく、彼女からの手紙で知つたのだ。彼は、しばしば友人を誘つてその店で買い物をした。もちろん彼女目当てだった。

最終学年になつて彼は決断した。桜が散り始めたある日、彼は思い切つて彼女に手紙を書いて渡した。一人で手渡す勇氣はなかつたので二人の友人に同行してもらつた。彼女は少し恥ずかしそうな素振りをしたが、避けることなく素直に受け取つた。彼は心臓がどきどきするのが分かつた。

くて、一日一日が無意味に流れた。彼のことを心配して、友人がいろいろデートの指南をしてくれたが、決心がつかずぐずぐずと迷う日が続いた。

五月になつて、恒例の定期健康診断があつた。いつもは呼び出されたことは無かつたが、今回初めて呼び出された。

「レントゲン写真に影があるから断層写真を撮る必要がある」とのことだった。断層写真を撮影後、担当の医師はその写真を示しながら言った。

「これが病巣だよ。鎖骨の下だから間接撮影では発見できなかったんだね。病巣が拡大して肋骨の外まで広がつてきたからわかつたんだよ。そうだなあ、発症してから三、四年はたつているね」

医師が写真で指差したところには直径一センチほどの白い輪が見えた。そう言われてみると、確かに思い当たることがあつた。日中に背中が非常にだるかつた。映画館で映画を見ているときも、背中がだるくてじっとして見ていられたなかつた。背中を左右に動かしながら鑑賞した。それに加えて昼間は疲労感が強かつた。夕方になると、だるさも疲労感も嘘のようにすつと消えて、エネルギーギッシュになつた。しかし、朝になると疲労感とだるさがどつと押し寄せた。この症状は肺結核からきていたんだと彼は思つた。

「どの程度の症状ですか？」

「うーん、やはり入院して治療したほうがいいよ」

でも彼女が受け取つてくれたことで十分満足だった。

もちろん、手紙を手渡したものの、返事が来るかどうか不安だった。友人たちは、「あの様子じゃあ、返事は来ないんじゃないのか」、「お前はあまりぱつとしない男だから、断りの返事が来る可能性が高いね」、「返事は来ないと思うなあ。相手がお前ではねえ。相手は美人だからなあ」とはやし立てた。

彼もそう言われるとまつたく自信がなかつた。でも手紙を受け取つたときの彼女の表情を思い浮かべるとき、やはり返事は来るような気がした。彼女が戸惑いながら手紙を受け取つたときの所作がちらちら浮かんでは消えた。

春季休暇になつた。彼は帰郷した。彼女から待ちに待つた手紙が来た。彼女からの手紙は寮ではなく実家に届いた。彼が、春期休暇には実家に帰ると手紙に書いていたからだ。

手紙には彼女のスナップ写真が一枚入つていた。文章はたどたどしかつたが、自分の気持ちを素直に書きつづり、彼の気持ちを汲んだ内容だった。彼は飛び上がるほどうれしかつた。しかし喜んだものの、その後どうしたらいいのか、分からなかつた。デートしないといけない。どこに行くのか、どんな話をすればいいのか、思索した。彼は女性とデートした経験がなかつた。それに加えて彼は人一倍内気だった。

学期が始まり、寮に戻つてきても、彼女を誘う勇氣がな

「入院ですか？」

彼は言葉に詰まつた。入院？ それは全く彼の頭には予定されていなかったことだった。

彼は一番頼りにしている兄に電話で相談した。兄はいろいろ手配をしてくれて、郷里の病院に入院することで落ち着いた。強制入院だった。他人に伝染する恐れがあるからという理由だった。強制入院は、結核菌が出ている患者に適用される制度だった。強制入院制度の適用があると入院費用は軽減された。

その頃には、ストマイとかパスなどの治療薬があり、入院治療すればほぼ全治する病となつていた。しかし田舎では一般にまだ死の病氣といわれて敬遠されていた。彼の家の近くの二歳年上の女の子も中学時代に肺結核に掛かり、二階に隔離されていたが、結局亡くなつた。当時は誰それが結核で亡くなつたという話はそれほど珍しいことではなかつた。だから彼自身にも結核は忌まわしい病氣なのだという思いがあつた。

彼は、彼女に結核に罹患したことを話すべきか否か悩んだ。真つ先に、彼には病氣を告白することが男としての矜持に反することのように思えた。彼は彼女に負い目を晒す自分の姿を思い浮かべた。体全体に屈辱感が駆け巡つた。これは絶対に避けたいことだった。

さらにもう一つ、不安なことがあつた。仮に病氣である

ことを告げたとしても、肺結核という忌まわしい病気である。だから、敬遠されるのではないか、ということだった。病状を告げたとたんに、驚いた表情で汚いものでも見るかのように後ずさりする彼女の姿が目につかんだ。これも彼女としては耐え難いことだった。

彼は、いろいろ悩んだ挙句、彼女には何も言わずに黙って郷里へ帰ることにした。一人で帰る列車の警笛は悲しく聞こえた。

六月に帰郷するとすぐにC県立病院に入院した。入院手続きは兄がすべてしてしてくれた。入院中に時々血痰が出たこともあったが、順調に回復、三月に退院した。主治医は、「完治したので復学してもいいよ。ただし無理はしないこと」と忠告した。

彼は、復学するとすぐに彼女が勤めていた洋品店に行った。しかし彼女はすでに退職していた。中年の従業員が「彼女は郷里に戻った」と教えてくれた。彼は戸惑い失望した。彼は思い余って彼女に手紙を書いた。

「春も真つ盛りになりました。店に行ったら、あなたは郷里に帰ったというのを聞きました。僕は三月に退院して四月に復学しました。今必要な講義を受けながら、卒論に取り掛かっています。入院するときあなたに言おうかと思つたのですが、肺結核という忌まわしい病気だったので、何も言えずに郷里の病院に入院しました。体の方は大丈夫

です。順調に回復して、健康体に戻りました。よかつたらまた付き合ってください」等々を簡潔に書いた。

彼女の郷里の自宅宛に出すので、自分の名前で出すと迷惑をかけるかも知れないと思つた。いやそれより、家の人から手紙が捨てられてしまうのではないかと恐れたのだった。それで架空の「木村美津江」という偽名で出した。幸いなことに、まもなく返事が来た。彼は胸を躍らせながら、封を切つた。消印は大阪となつていた。

「手紙を見て、驚きました。病気で入院されていたとは全く知りませんでした。

あなたから返事もなく、店にも顔を見せなくなったので、私はてつきり見捨てられたんだと思いました。

あなたが姿を見せなくなつてしばらくして、あなたの親友のKさんが私のところに来ました。そうして『彼はおう君のところには来ない。俺と付き合つてくれ』と言うのです。私はびつくりしました。そう言われても全く信じられませんでした。

私にとつては、あなたの雰囲気、態度から考えても、ありえないことでした。それにあまりにも唐突だったからです。しかもKさんはあなたの友人です。どう考えても私にはKさんを受け入れることができませんでした。私ははつきり断りました。

Kさんはその後も何度も店にやってきました。そうして

私が仕事を終えるのを待って、『俺と付き合つてほしい』と迫りました。私はその度にそんな気持ちはないと断りました。それでもKさんは執拗にやつて来て、交際を迫りました。あなたのことに關しては、『君のところにはもう来ない』と同じことを言うばかりでした。私は何度かKさんにあなたのことを尋ねました。でもKさんの言うことはまったく同じでした。私は裏に何かあるのでは？ とは感じ取つたんですが、それ以上は何もわかりませんでした。ましてやあなたが肺結核で入院することなど想像もつかないことでしたから。

Kさんがあまりにも頻繁に来るので、店にも迷惑をかけることになつてしまい、そのこともあつて私は九月にお店をやめました。

私は、あなたが何も告げることなく去つたことを恨みましました。私はとても悲しい思いをしました。あなたの私に対する気持ちはその程度だったのか、と思うと裏切られた気持ちになりました。また、あんなに非常識な言動をするKさんを友人に持つているあなたに不信感を抱きました。そうしてあなたもKさん程度の人なんだ、と思ひ込もうと努力しました。そう思ひ込むことで自分の心の傷を癒そうとしました。

でも、あなたからの今回の手紙を見て、私が思い違いをしていたことを知りました。でもなぜ病気のことを言つて

くれなかつたのか、今でもあなたにひとこと言いたい気持ちです。お見舞いにも行つてあげたかつたし、私にだつて、あなたにしてあげられることもたくさんあつたと思うのです。それを思うととても残念です。

わたしは今大阪で働いています。近々結婚します。お元氣でお過ごしください。あなたの前途を祈つてやみません」

「私は結婚します」という最後の一行を読んだとき、彼の心臓は鼓動が止まつた。天井がぐるぐる回つた。脈拍が全く感じられなかつた。その時間が三十秒にも五十秒にも思われた。「心臓が止まつた」というセリフは小説やテレビでもよく出てくるが、それとは全く違つた次元の現象だった。これほど脈拍が止まつていいのか？ と思うほどだった。彼はそれほどショックを受けた。彼はその日は一日杳然として過ごした。

友人であるKが別に悪い性格の人間というわけではない。Kは、両親がいなかつた。小学校時代に両親を次々と亡くしていた。そうしてKは伯母に引き取られた。Kはいつだつたか、寮の下の学生専門のラーメン屋で数人の友人とラーメンをすすり、ビールを飲みながら言つた、「俺は、伯母には足を向けては寝られない」と。酒が入るたびにこの言葉がKの口からもれ出た。

彼は三浪していた。東京のT大を三度受けたと言つた。伯母は言つたそうである。「合格すれば入学金は支払つて

やる。後は自分でやっていくんだよ」と。

Kの家も極貧の家庭だった。だからKは学生課の斡旋で家庭教師の口を見つけてもらい、その二口を掛け持ちしていた。法学部でまじめに学び、講義もきちんと出席していた。単位も他の学生よりも多く取っていた。そうして卒業後は、一流商社に就職した。

彼は思った。彼もやはり彼女が好きだったんだ。そうでもないとストーカーのように彼女を追いかけはるはずはない、と。それでも、彼にとってKは裏切り者、友情に欠けたおぞましい人間、ということになる。しかし彼にはKに対する憎しみ、恨みはなかった。

彼女がKの求愛を受け入れなかったことが、彼にゆとりを持たせた。でも、「Kの愛をなぜ彼女は受け入れなかったのか？ Kだって素敵な男だったのに」。このことは、彼にとっては永遠に解けない一つの謎だった。「俺を愛していたから、Kを拒んだのか？」。彼は自分にそれほど自信はなかったが、そう思ったかった。彼は彼女を一層いとおしく思った。そうして尊敬の念さえも抱いたのだった。しかし彼にはそれ以上女性の心を推し量る判断力はなかったのだった。

ちなみに、彼とKとの友情は今も続いている。彼が復学してからも、Kは彼のアパートによくやってきた。彼女のことには彼も触れなかったし、Kも自ら口にすることはな

した。彼にはそれがなにか悲鳴のように聞こえた。

彼女から返事は来ないはずだった。彼女との関係もこれで絶つのだという思いだったのだ。

ところが、その来ないはずの返事が来たのだ。その手紙には彼の優柔不断さと不実に対して、便箋五枚にありつたけの非難の言葉が盛りだくさん。「意気地なし！ 卑怯者！ 人でなし！ 臆病者！ 冷たい男！ 残酷な男！ 人の心が読めない男！」、その言葉一つ一つが彼の心臓にぐざりぐざりと突き刺さった。五枚目の便箋の字はどれもがにじんだようになって、読み取ることができなかつた。彼は茫然とした。なぜだ？ なぜ？ という思いだった。彼女の前途を祝福するつもりで書いた手紙だったのに……。彼は砂漠に取り残された狼のようだった。

彼は彼女の暗示を理解できなかつたのだ。それに気がついたのは就職していろいろな人との付き合いが生じてのことだった。研究所の二年先輩はげらげら笑いながら、酒に酔った勢いで言った。

「お前は、女性心理をまったく理解していないんだな。お前は女の真心を踏みにじったんだ。『私は結婚します』という一行も、『私が好きなら、迎えに来てよ。私を略奪してよ』という意味だったんだよ。お前も鈍な奴だったんだな。いい女だったんだよ、きつとね。そんなことじゃあ女にもてないよ。女が愛想を尽かしてしまうぞ」

かった。Kは自分のB子に対する行為がすべて彼に知られているとはつゆ思っていないだろう。彼も将来そのことをKに告げることは考えていない。

「俺は素敵な女性を失ったんだ。しかも自分のせいで」と思うと、彼は泣きたいような衝動に駆られた。「あの時、病気であることをなぜ言わなかったのか？」彼は悔いた。彼にとって、彼女の存在はますます大きい比重を占めるようになっていった。そんな思いに浸りながらも、「結婚します」という言葉が、オスミウムの塊を胃の中に押し込まれたように重たくのしかかっていた。

十月になると卒業後の進路も次第に具体化していった。このころには彼女に対する思いも諦めに変わっていた。彼は「くよくよするな、お前らしくないぞ」と、時々自分に言い聞かせた。そうして彼は自分の進路が決まったことで彼女に最後の手紙を書いた。

「お元気ですか？ 秋もたけなわです。郊外に出て行くこと稲の取入れで田んぼも賑わっています。僕はG会社の研究所に就職が決まりました。あなたとはわずかな繋がりでもしかなかったのですが、これからはお互いに自分自身の道を歩いていきましょう。あなたのご結婚を心から祝し、幸福な家庭を築かれることを心から祈っています」

など、簡単な文だったが、思いをこめて彼は書いた。そうして投函した。ポストの中から、「コトン」という音が

総務部の中堅女性が話を継いだ。

「そうなのよ、最後の手紙だって、あなたを罵倒するために書いたんじゃないのよ。これだって、まだ『迎えに来てよ』というメッセージだったのよ。あなたは大阪に行くべきだったのよ。だって、そうでしょ？ あなたね、好きでもない男から手紙をもらったからって、返事を出す女性っていないわよ。気にもしてない男なら、私だつてののしつたりはしないわよ。ましてや遠く離れているんでしょ？ 返事を出さないだけよ。その人の気持ちってほしいほどわかるわよ。手紙の字がにじんでよく読めなかつたって、それって泣きながら書いたんじゃないの？ たぶんそうなのよ。あなたって、愚かな男だったのねえ」

そう言われて、彼は初めて「彼女は真実の愛の告白をしていたのだ」と、気がついたのだった。五枚目の便箋が目の前にオーバーラップした。彼は思わず目を伏せた。彼女の真の愛を、自分も心から彼女を愛していたのに、無残にも無視した男。

彼は「私は結婚します」という最後の一行を、そのまま受け取ったのだ。

彼は自分を恨んだ。決断力、実行力のない男、思いやりのない男、女性の心が理解できない男。彼は呻いた。

(完)